

きた季節の感受性。そうした短歌・俳句の持つ様々な特質を、現代に通じるものにしていくことが国語教育に求められているのではないかと考える。

4. 短歌の創作活動を通して育まれるもの
最後に創作活動を通して、児童・生徒のどのような資質・能力が育まれるのかを検討してみたい。本章では筆者が関わった二人に焦点をあててみたい。

(1) Aさんの例

Aさんは二〇〇六年に中学校に入学した生徒である。Aさんは二年生の時に筆者が顧問を務める文芸部に入学し、十名程度の部員とともに創作活動をはじめた。同文芸部の創作活動の幅は短歌・俳句・詩・小説・随筆・ラジオドラマ作りなど多岐にわたっており、年数回の部誌を発行するとともに、文化祭では朗読発表や作品展を開催していた。Aさんは当初はイラストを描くことを好んでいたが、短歌に出会ってから熱心に短歌を作るようになっていった。

① 誰かいる扉の向こうかわいそうといった誰が閉じ込めたの？

② 誰か来たこんな牢屋にカワイソウどんな意味なのもつと教えて

③ 黒羽羽死の舞い踊り悲しみをこの世に運ぶ地獄の使い

①②③はAさんの初期の短歌作品である。まず、短歌の型式のリズムをしつかりと踏まえていることに注目したい。筆者は文芸部では「俳句カルタ」や「百人一首」を取り入れ、定期的に短歌・俳句のリズムに触れる「場」を設けていたが、Aさんはそれらの活動を通して「型」を身につけていったようである。

④ 秋になり空の顔色すぐ変はる昨日は真つ赤で今日は橙

⑤ 亡き人の声を伝へる赤蜻蛉卒塔婆に留まり何を思ふか

④は文学散歩で市内の旧跡を散策した時の作品である。筆者が文芸部で重視したのは、創作の「場」の拡大を図り、「言葉」の世界を広げることであった。勤務校は北関東の城下町にあったため、市内には史跡が散在しており、それらの場所を散策する機会を設け、創作活動を取り入れていた。また、長期休業中には、近隣県にも足を伸

ばし、文学散歩を実施した。Aさんはそうした活動の中で、徐々に自分の「想像」の世界と「現実」の世界の言葉を繋げていったようである。

その後、Aさんは系列高校に進学し、文芸部に所属し、創作活動を継続した。高校進学後もAさんは熱心に短歌の創作を続け、岩手県盛岡市で開催されている短歌甲子園にも三年連続出場した。

⑥ 道端で手相占う婆に聞く

「てのひらとかで決まる人生？」

Aさんは短歌甲子園では入賞を果たすことはなかった。しかし、高校三年生の夏の大会で発表した⑥の作品はAさんの成長を示すものと考えられる。手相で人生は決まらなという心情を詠んだAさんの作品からは思春期を乗り越えつつある心の成長を伺うことができる。Aさんは高校卒業後、他県の医療系大学に進学し、現在は医療関係の仕事に従事しつつ、短歌の創作活動を続けている。

Aさんに本稿の執筆にあたり、「短歌の創作を通して身につけたことは何ですか」